Ⅳ-86　海岸域の空間認識の諸形態に関する研究

東京工業大学　学生会員　野中　賢
東京工業大学　正 会 員　中村　良夫
運　輸　省　正 会 員　斎藤　潮

１．研究の背景と目的

かつて漁業や航海など生活の基盤として存在していた海に、レクリエーションの場としての存在価値が認められて久しい。「楽しむための海」へと質的な変化を遂げる中、海辺における景観体験が改めて注目される。それをふまえ本研究では、海辺の空間を近接海水面および後背の内陸域まで含めた一体の領域（＝海岸域）としてとらえ、トータルな景観デザインを行うための知見を得ることを目的とする。

２．伝統的な海岸の空間認識

文献調査の結果、海岸の風景は主に①漁場の特定、②航路の確認、③内陸からの眺望等の体験を通じて認識されていたことがわかった。①②については、表１・２のように現在地・進路等を確認するための語彙や、実際に外海から港に入るときの目印に関する記述が残されている。ここでは海上から見える内陸の地形、特に刻々と変化する山の重なり方に注目しながら安全を確保していたと考えられる。また③は、江戸時代の名所図絵に海辺の風景が数多く描かれていることからもわかる。そしていずれの場合も、海岸・内陸部・海水面は別々のものとしてでなく、各場所での活動や景観体験を通じて、一体にまとまった領域（＝海岸域）として認識されていたことが確認できた。

表１　海岸認識に関する語彙

［認識の方法についての語彙］	
あて	・自分の現在地を知るための目標
やまあて	山を目標として海上で船の位置を知る方法
やまをみる	
やまをたてる	
やまをあわせる	
［二つのアテの位置関係についての語彙］	
～もたれ	・二つの目標物が重なって見える状態
～がけ	・近い目標が遠い目標の正面に見える状態
けぬき	二つの岬がほとんど接触しそうに見える状態
けぬきあわせ	
さしあい	二つの岬の突端が触れ合って見える状態
やぐち	
くいあわせになる	二つの山がぴったり重なって一つに見えている状態
ぴったりしている	
はずし	・近い目標の後ろに遠い目標が隠れ始める状態
［一つのアテの見え方についての語彙］	
～出し	・目標物が見えている地点
やまなし	目標物が見えなくなった地点
たひら	
だいなん	

３．海岸域における空間認識モデル

文献調査の結果いろいろな海岸認識の手法が発見できたが、これらのほとんどは漁民などごく一部の人に受け入れられているだけである。ではこれらの手法を一般的な風景の認識方法に生かすことはできないだろうか。そこで抽出した海岸域の空間認識手法を整理し、表３のようなモデル化を試みた。このモデルは、景物の人間に対する働きかけに注目して作成されている。人間がどの様に景物を見るかという景物の「見方」よりも、見える景物によってそれを見ている人間がどのように位置づけられるかという点を重視したわけである。例えば漁場の特定をする時は、見える景観の有り様に対して人間が自らの活動を通じてそれぞれの景物に意味を見いだし、活動にかかわる空間相互の関係づけを可能にしていたといえるだろう。つまりある景物が見えることによってそこが漁場であると確認で

表２　東海船路道中記にみられる海岸認識についての記述

［入港の方法を記している部分］

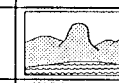
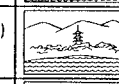
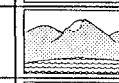
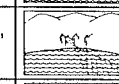
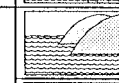
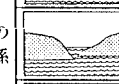
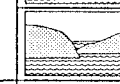
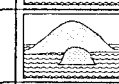
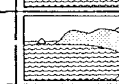
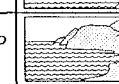
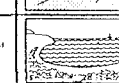
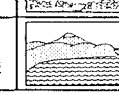
・みなとあり。上口の出はなに常燈有
・上の山にかうがい松とて大木あり。平かたへ入津の目あてとしてこの下口平潟のみなとなり
・ぬかどのみさきに宮あり沖灸目あて也
・此みなと入を。上沖より見るには。下のいきす崎の少し上にとがり山有。その上にかぜなしのはな。その上に砂浜あり。其次に山少し高く。又次の山ひくし。少しはげあるところ福良のみなと也

きたり、方向を変える地点であると判断することができるわけである。このモデルは、そのようにシークエンスの中で特に重要性を持つ、いわば節目に当たる地点における視体験について扱っている。

４．道具としての認識形態モデル

このモデルをデザインに応用する際には、景物の空間認識上の位置づけが大切である。例えばある岬を景物として取り入れるとき、その岬と背後の山との位置関係が最も意識される場所においては「かかり」に当てはめることができるし、その突き出した形状自体が最も意識される場所でなら「みなし」として認識される。つまり同一の景物に対して多様な「見え方」があり、そのそれぞれに応じてここに示したモデルを適用でれば、その景物は「空間認識」という観点から海岸域にとって重要な存在であると意味づけできる。このような景物に対してはモデルに即した視点場を積極的に設けたり、内陸部からの見え方をモデルに即して演出すると言ったデザインへの展開が可能であると思われる。

表３　海岸域における空間認識の形態モデル

見え方	認識のポイント	認識の形式	認識の内容	景　物	モデル図
見留め（みと）	注意力の収斂（しゅうれん）	みなし	見立てを促す	山, 岩, 島, 岬	
		形の突き出し	周囲に対して目立つ形を捉える	建築物(寺社) 松, 岩	
		色の浮き出し	周囲に対して目立つ色を捉える	植生, 岩, 火, 建築物	
		動の見出し	動きを捉える	波, 漁業活動, 潮干狩	
重なり	活性点 緊張感	もたれ	一つの端が、もう一つの端の後ろに重なって見える	岬, 山, 島の相互関係	
		けぬき	端の先端同士が、わずかな隙間をつくって向かい合って見える		
		さしあい	端の先端同士が、触れ合って見える		
		かかり	遠い目標の真正面に近い目標が位置する	建築物, 燈台, 樹木	
かくれ	見えかくれの対比		近い目標が遠い目標を覆い隠していく	岬, 山, 島	
長手見（ながてみ）	注意力の誘導	たぐりよせ	弓なり海岸の先端に目標が見える	砂浜海岸と島, 岩, 岬	
	輪郭の誇張	際の曲がり	海岸線の出入りや起伏が強調されて見える	海岸線に沿った微地形	
高台見（たかだいみ）	水平線の迫り上がり	切取り	切り取られた突き当りに海が見える	海水面, 街並, 山	
		頭越し	近景の上に海水面がかぶさって見える	水平線, 街並, 山並	
	平面的認識	見はらし	土地の様相が鳥瞰的に見える	海岸線, 植生, 土地利用	
水越し見	近景省略による引き立て		海が引きとなって目標が見える	海水面, 山, 建築物, 街並	

５．結論

本研究の結論は以下の三点に要約できる。

①空間認識上一体である、「海岸域」という領域概念を提示した。

②伝統的な空間認識手法と重要な景物を整理した。

③海岸域の景観デザインのためのモデルを提示した。

＜主要参考文献＞

・桜田勝徳「漁撈の伝統」

・斎藤潮「海岸景観およびその体験の典型に関する研究」

＜資料＞

・江戸名所図絵

・日本舟船絵図

・海上保安庁発行　水路図